

国際漁業学会 (JIFRS) 短信

<http://www.jifrs.info/>

事務局 〒631-8505 奈良市中町 3327-204 近畿大学農学部内

E-mail: jifrs.kindai@gmail.com

郵便振替番号：00100-6-26448 国際漁業研究会

三菱東京UFJ銀行富雄（トミオ）出張所 普通口座 3698979 国際漁業研究会

2016 年度第 2 号

2016 年 11 月 5 日刊

目次

- | | |
|----------------------------|--------|
| 1. 理事あいさつ「限界を超えて」 | 婁 小波 |
| 2. IIFET2016 体験記 | 若松 美保子 |
| 3. 2016 年度国際漁業学会大会参加報告 (1) | 岩田 繁英 |
| 4. 2016 年度国際漁業学会大会参加報告 (2) | 沖園 寛 |
- 事務局便り

1. 限界を超えて

婁 小波 (国際漁業学会理事・東京海洋大学)

今年の夏は、オリンピック一色であった。

新聞やテレビは連日、地球の裏側で行われたリオ五輪を報道したし、多くの国民がテレビの実況中継をみながら選手団の活躍ぶりに興奮した。つい先日も、メダリストたちの功績を讃えるために東京銀座で祝賀パレードが盛大裡に開催された。主催者によると、当日はなんと 80 万人を超える史上最高の人出があったとのことだ。

筆者も祝賀パレードの日に偶然、近くを通りかかった。メダリストを乗せたバスは歓声と祝福の声に包まれ、行きかう人々はリオ五輪の余韻に浸っていた。熱気が充満するパレードの光景をこの目で直にみるのができたのはとてもいい体験となったのだが、おかげでしばし渋滞に巻き込まれ、危うく会議に遅刻しそうになった。

五輪の話は、夏も終わり「小さい秋」をあちらこちらで見つけることができるようになった今頃に、なぜか、再び熱を帯びるようになった。東京都知事が舛添氏から小池氏に替わり、コスト削減や復興五輪という大義名分の下、2020 年に開催予定の東京五輪ボート・カヌー会場などに関する見直し構想が示されたからであった。宮城県登米市長沼ボート場なのか、埼玉県の彩湖なのか、はたまた原案の「海の森」に戻すべきか、やじ馬根性的にはとてもエキサイティングな興味深い話のネタができた。もっとも、この原稿が読まれている時分にはすでに結論が出ているかもしれないが、筆者としては、4 年後に国民が再び五輪に熱狂できれ

ば、どこでだっていいようにも思っている。

それよりも、築地市場移転に「待った」をかけて、拍手喝さいを浴びて登場してきた小池新知事が、東京五輪についてもこれだけ切り込むとは、誰が予想しただろうか。「安倍マリオ」が話題をさらったリオから五輪旗をさっそうと持ち帰ってきた時には、五輪会場をめぐるこのような大騒動が起きるとは予想だにできなかったのは、筆者一人だけではないはずだ。それにもまして、数万円の宿代・数万円の絵画代・数万円の飲食費・クレヨンしんちゃんの絵本からはじまった都知事の交代劇が、「TOKYO2020」にこれほどの影響を及ぼすことを、だれが想定したのであろうか。

おかげでロランやらバツハやら、さては村井知事やら上田知事やらと、普段あまり馴染みのなかったお歴々のお名前が、半ば半強制的に記憶の中に刷り込まれた。また、関係者一同が「同じボートの乗組員」であるとか、アスリートファーストとか、政治的中立だとか、普段意識の欠片にもなかったこれらのことについても否応なく考えさせられてしまった。そもそも、オリンピックとは何のためにあるのか、世界平和とは何か、選手は何のためにガンバるのか。自己実現のためなのか、メダルのためなのか、それとも名誉のためか、国威発揚のためか、疑問はつきなかった。

こういった疑問について考えていくと、ふとオリンピックは人間の限界を超えるための装置なのではないかと思った。定められたルールの下で人間の身体的能力の極限に近づく努力をする、というのがスポーツ競技であるならば、オリンピックはまさにその人間の身体的限界を超えさせるための仕組みとして、あるいはプラットフォームとして機能しているのではないかと。

よくよく考えてみると、どうもスポーツ競技だけが人間の限界を超える唯一の手法ではないようだ。人類の文明史は、人間の限界を超えつづけてきた歴史でもあった。

産業革命は機械化をもたらし、人間社会の生活や生産活動などのあらゆる場面において人々の身体能力の限界を突き破ってきた。例えば、蒸気機関船や電車や車、さらには飛行機などの発明によって、二足歩行でしか移動できない人類は、その移動能力を飛躍的に高めた。また、コンピューターやインターネットなどの情報通信技術の発達は、限られた人間の記憶力や計算能力を飛躍的に高め、ローカルに限定されてきた人々の交流を、一気に世界的な規模までに広げることを可能とした。それらによって、一瞬のうちに人と人との間に情報を交換でき、心をつなぐことができる。さらに、人間の知力の限界を一気に突き破りそうなのは、AI（人工知能）技術である。近年、深層学習を応用した囲碁や将棋ソフトの実力が、何かと話題をさらっているが、AI技術はありとあらゆる生産・生活の場面において人間の限られた知力を補う存在としての可能性を秘めている。

このような人類の持つ能力という限界を超えつづける現象に、われわれは単に発展や文明という言葉が付与しているにすぎなかった。

人類は自らの限界を超えることを、単に身体的な能力や脳の能力に限定して行われてきたわけではないようである。人々の暮らしを豊かにする社会活動の一つである経済分野においても、限界を超えるための歴史はあった。

1966年にK. ボールディング(K. E. Boulding)が『宇宙船地球号の経済学』を発表して以来、

地球の資源は無尽蔵ではなく、環境は無限大でもないことが知られるようになった。そして、1968年に結成されたローマ・クラブの研究委託を受けて、1971年に発表されたメドウズ教授らの『成長の限界』は、無尽蔵な資源を前提として謳歌してきた経済成長の神話に警鐘を鳴らし、有限な資源に制約された形での成長の限界を如何に克服するかについて問題提起した。このような有限な資源、有限な環境による制約は、いわば、「資源の限界」とでもいえよう。

この「資源の限界」とは別に、「市場の限界」とでも呼ぶべきもう一つの経済の限界がある。イギリスやドイツにおける産業革命を契機とした工業化の進展は、自国の生産力を飛躍的に高め、経済を成長させたと同時に、過剰な生産を引き起こし、国内に限定されてきた市場の需要不足が問題として現出された。この市場不足問題は、その後フランスやアメリカなどにおいても確認できた。つまり、限られた一国の市場だけでは、飛躍的に高まった自国の生産能力を満たすだけの需要を提供することができなくなったのである。

このように、経済の限界には「資源の限界」と「市場の限界」との二つの限界がみられる。ただ、資源の限界に比べると、市場の限界はより早く認識されており、そしてその限界を突破するための行為が、時代とともに変化している。

交易や貿易はこの市場問題を解決するための古典的な方法ではあるが、植民地経営がイギリスやフランスやドイツなどの列強による問題解決の方法としてより広く知られている。現代においては、マーケティングによる市場の創造が有効な手法として開発されてはいるものの、市場が無限大に創出できるというわけではないのである。結局、海外に活路を求めて、市場を広げることが選択されざるをえなくなってくる。

その結果、グローバル化はまさに現代における「市場の限界」を超えるための必然的な産物となった。つまり、グローバリゼーションはこの国家や単一市場の限界を突き破る一つのベクトルとして、今日否応なしに国民国家に突き付けられるようになった。

ところが、この「経済の限界」を乗り越える必然としてのグローバル化には、多くの逆効果も懸念されている。曰く、グローバル化は一部の大企業や多国籍企業に利するだけで、一般国民の利益が損なわれてしまうとか、国内経済・地域経済の自律性の喪失や多様性の喪失とか、さらには国柄の破壊や地域の破壊をもたらすなど、多くの批判を受けている。

「限界を超える」のには、本来副作用は付きものである。産業革命による工業化の進展は自然の破壊や環境の汚染を引き起こし、人間の「疎外」が指摘された。オリンピックを頂点とするスポーツ競技でもドーピングの問題がクローズアップされ、リオ五輪では厳しい対応が迫られた。どうでもいいことではあるが、あの銀座の祝賀パレードでさえ渋滞が起き、大事な会議にこちらが参加しそびれそうになった。

いざ病気ともなれば、健康体にはなりたいたいで、薬は飲まざるを得ないが、願わくば副作用はできるだけ避けておきたい。人間なら普通にある心情だと思うが、しかしそんな特効薬にはなかなかお目にかかれない。グローバル化に向けた懸念の多くも、このような薬への期待や心配にも似たような心境だろうと推測する。あの素晴らしいパレードでさえ、渋滞という副作用をひきおこすが、正直なところそれも大した影響ではなかった。後は要するに幾ばくかの社会的常識との葛藤と、己の覚悟次第であろう。

懸念されるべきは、グローバル化現象を神聖視するグローバリズムという怪物の存在なのではないか。グローバル化に対応しなければ世界に取り残されるとか、グローバル人材を教

育しなければ国に見捨てられるとか、英語で一律 TOEIC600 点を取らなければグローバル人材ではないとか、グローバル人材育成のためなら日本語教育を放棄してもよいとか…。まさに「健康のためなら死んでもよい」という奇怪なパラドックスが、いま日本の高等教育の現場を席卷しているところに、この怪物の恐ろしさがある。

グローバリズムという妖怪が席卷すればするほど、その副作用はよりまき散らされ、被害は幾倍にも増えることになる。そして、グローバルからナショナルへ、グローバリズムからナショナリズムへの反動も起こってくる。その一方で、グローバル化という薬の効き目はどうなのだろう。少なくとも特効薬ではないことは確かである。

このように、われわれは今「限界を超える」ことの限界に直面している。だから、というわけではないが、「グローバルからインターナショナルへ」、「グローバリズムからインターナショナリズムへ」という声も聞こえてくる。インターナショナルの価値が見直されているわけである。

否応なしにすすむ経済のグローバル化の下で、インターナショナルを標榜する国際漁業学会は、このインターナショナルとグローバルとの接続と融合を如何にして図り、どのようにして研究成果をインターナショナルに、さらにはグローバルに発信しうるか。グローバリズムが進み、研究環境が悪化しつつあるいま、これらのことについて考えてみることは、決して無意味ではなさそうである。

2. IIFET2016 体験記

若松美保子 (九州大学)

2016 年 7 月 11 日から 15 日にイギリス・スコットランドにて IIFET2016 が開催されました。雨の多いイギリスという期待に反することなく、雨が多い大会となりましたが、雨の合間に覗く晴れ間は美しく、濃い緑とレンガ調に統一された街並みが映えていました。蒸し暑くなり始めた初夏の日本から来た者にとっては、北緯 57 度の都市、アバディーンは薄寒く感じられたのではないのでしょうか。私も薄手のコートが大変重宝しました。

大会は IIFET Fellows を受賞された Gordon Munro 氏と Collin Clark 氏の基調講演によって幕開けとなる予定でしたが、航空機のトラブルにより到着が間に合わなかった Collin Clark 氏に代わって二人分の発表を Gordon Munro 氏が急遽担うというハプニングもありました。Munro・Clark 両氏といえば、Capital Theory を漁業経済学に導入したことで知られ、私も大学院の授業ではお二人の論文に大変お世話になりましたので、今回の基調講演を楽しみにしていました。講演では、漁業の問題を投資の問題と捉え、静的ではなく動的に考えることの重要性が訴えられました。さらに、Munro 氏は、政策の現場において、自身の研究結果が意図しない方向に解釈され、政策が決定されていることを指摘していました。例えば、資源量の回復プログラムのために漁業を完全に禁止する例があります。こうした政策が経済的に合理的であるためにはいくつかの条件が満たされていなければならず、やみくもに実施するべきではないと強調されていました。さらに、今後の発展が望まれる研究として、2 つ

の方向性が紹介されました。1つは、資源量を回復させる際に、不可塑的資本（人工、人的）をどう考えるか。2つ目は、ゲーム理論により戦略的相互作用を加味して、EEZ内の漁業管理においてどのように協力体制が出現するのか。特に、後者の点においては、日本には数多くの事例があるので、新しい理論に帰納することができたら、漁業経済学における大きな貢献となり得るのかもしれない。



(Munro 氏による講演の様子)

個別報告に関しては、84 セッション、350 以上にも渡る研究発表があり、参加者は実に 65 カ国以上の国々から集まりました。興味深かった研究報告としては、Martin Smith 氏の “The Effects of Strategic Firm Behavior on Aquatic Ecosystems: Disease Risk and Market Structure in Salmon Aquaculture” です。拡大する養殖産業が今後も成長を続けていくためには、魚の病気をいかに制御していくかを考えることは避けて通れません。Smith 氏は、衛生管理の基準の違う複数の国（ノルウェーやチリ等）に養殖場を持つ業者を想定し、国際市場構造がそうした業者の安全対策に与える影響を理論的に分析しました。それによると、競争状態が必ずしも安全対策に良い影響を与えるとは限らないことが示されました。また、発表では数式を一切用いず、図による直感的な理解を深めるスタイルで、大変おもしろかったです。他には、British Columbia 大学の Rashid Sumaila 氏の発表では、様々なデータから、漁業における補助金政策が資源の持続可能性だけでなく不平等を助長していることが訴えられました。

私自身は、今回、Economics of protected resources というスペシャルセッションにおいて、鯨保全政策に関する 2 つの研究を発表しました。絶滅危惧種の経済評価の研究は、英語圏、特にアメリカの事例に偏っているため、アジアにおける我々の試みに大変興味を持ってもらえた印象です。鯨肉を食べる地域と食べない地域における価値観の違いから WTP の推計方法のテクニカルな話まで、質問は多岐にわたりました。海外における研究者のネットワークも広がり、大変有益なセッションでした。

最後に、その他の雑多な点を報告します。今回の日本人の参加者は約 10 名。京都学園大学教授の内藤登世一先生、東京大学特任研究員の杉野弘明さん、ワシントン大学博士課程の阿部景太さんに今回初めてお会いしました。IIFET Best Student Paper Award は、同賞の初回受賞者である Duke 大学の Martin Smith 氏の学生、Anna Birkenbach さんが受賞しました。

2 日目の夜に開催されたバンケットは、アバディーン湾のビーチ沿いの建物内でした。着

席形式のコース料理で、テーブルでは Gordon Munro ご夫妻とご一緒しました。隣に無邪気に座った知り合いの博士学生が、“What’s your name?” と Munro 氏に尋ねて、返答を聞いた時の表情は、今思い出しても笑いがこみあげてきます。バンケットにおいて、次回開催地がシアトルに決まったことも発表されました。日本からも交通の便が良いので、多くの日本人研究者が参加されると良いですね。



(多田先生による JIFRS 山本賞の発表、IIFET 事務局の Ann Shriver 氏 (左) とバンケットでの様子 (右)。バンドの演奏に合わせてスコットランドのフォークダンスを踊る。八木先生の華麗なダンス姿も。)

3. 2016年度国際漁業学会大会参加報告

岩田 繁英 (東京海洋大学)

2016年8月6日から7日の期間に専修大学神田キャンパスを会場として、国際漁業学会 (JIFRS) 2016年度大会が開催されました。6日の午後はシンポジウム(内容は6名の報告とパネルディスカッション)、7日の午前中から午後にかけて個別報告(16名の報告)が行なわれました。JIFRSには、妻小波先生、川辺みどり先生が関係されているプロジェクトへの参加をきっかけに入会したため、今回は初のJIFRS参加となりました。私は水産資源解析学、数理モデル解析、生態学といった経済・経営とは異なる分野で研究活動をしてきたため経済系の学会とはご縁がありませんでした。そのとき以前、他学会で企画したシンポジウムを通じて、松井隆宏先生が主催されている近代経済学・経営学的漁業経済研究会(TEMF)を紹介していただき、何度か参加するようになりました。本稿ではJIFRSとともに8月8日に開催されたTEMFについても報告をさせていただきます。

シンポジウムは、「水産業における国際貿易研究の到達点と展望」の下で進行しました。ミクロ・マクロ経済学、経営学それぞれの学問の中で頭打ち感がある状況で、ブレイクスルーのきっかけとして、理論(小川健先生、沖本まどか先生)、実証(中島亨先生、若松宏樹先生)、制度(猪又秀夫先生、海部健三先生)の3つの側面から報告・議論がなされました。理論では理論モデルのレビューと貿易障壁撤廃の影響を明示したモデルが報告され、実証では理論モ

デルのつながりから TPP が水産業に与える影響の解析結果が報告され、制度では外部経済・外部不経済がある場合に、エコラベルの適用や国際関係論の知見がどのように役立つか報告され、議論されました。理論から実証、制度まで一連の流れで取り扱うことで要点が整理され、今後の研究活動の発展につながると感じました。

2日目は、二会場に分かれて、個別報告が行われました。私自身の報告があったため全ての報告を聞けませんでした。国内外の事例考察から理論モデル解析、計量経済的分析まで多岐にわたる話題とアプローチが取り上げられていました。初めて参加する身としては、分野横断的なアプローチが受け入れられていることに私の専門分野との親和性を覚えるとともに発展性を感じました。今後の研究活動に新たな知見を取り入れることで単一分野の研究として面白いだけではない学際的な研究を生み出していきたいと感じました。

8月8日には JIFRS 大会と同じ会場で近代経済学・経営学的漁業経済研究会(TEMF)が開催されました。TEMF では発表時間や質疑応答が長く設定されており一つ一つの報告に対して出席者から多くの質問や意見が飛び出していました。TEMF の特徴は JIFRS とも異なり、より自由闊達と表現するのがふさわしいと感じます。立場も気にせず面白い、重要だと思う点を表現しそれに対する意見がどんどん出てきます。参加者も JIFRS 関係者を基本として私のような門外漢もおり学際的な研究を育むよい環境があるなど感じています。

今回 JIFRS 大会と TEMF に参加させていただき充実した3日間を過ごすことができました。最後に今回の JIFRS 大会事務局スタッフの皆様、TEMF 世話人の松井隆宏先生に厚くお礼を申しあげます。

4. 2016年度国際漁業学会大会参加報告

沖園 寛（専修大学・小川ゼミ所属）

2016年8月6日・7日に渡り、専修大学神田校舎にて国際漁業学会2016年度大会が開催されました。私は本学会の会員ではありませんが、学生アルバイトとして両日全てのスケジュールを聴講させて頂いたため、以下にその感想を寄せさせていただきます。

初日はシンポジウムが行われました。今回のシンポジウムは「水産業における国際貿易研究の到達点と展望」をテーマに、理論編、実証編、制度編と3つに分け、それぞれ各2名による報告が行われました。この発表では大学教員は勿論のこと、水産庁職員の方などの報告もあり、研究者の一方的な視点に終始しなかったことは、貿易という事象を考える上で、非常に重要であったと思います。

制度編では、中央大学法学部所属の海部健三先生にもご参加頂きました。保全生態学をご専門にされていますが、「鰻の問題を解決するためには社会の制度と関わる必要がある」ということで、法学や経済学の研究者とも関係を持たれていると聞き、学問分野の区切りの曖昧さを改めて認識しました。

またこの点は、水産庁の猪又秀夫様の報告にあった、一つの研究対象に複数の学問分野を適用することと密接に関わると思いますが、諸分野の研究者の高い技能の融合が期待される

のではないのでしょうか。

二日目の個別報告では合計12名が報告を行いました。そのうち6名分を聴講致しましたが、シンポジウムよりも更に幅広い立場の方々の、多岐に渡る内容を聞くことが出来ました。国内のナマズやアサオから、アフリカのタコまで国際漁業の名に相応しい非常に多彩な顔ぶれとなりました。調査報告のみならず、理論研究や水産貿易にまつわる制度分析等もあり、初日のシンポジウムとの相乗効果も狙える構成だと思います。

質疑では同じ分野の発表を行った方を中心に活発な議論がなされていましたが、これを異なる分野間でも交えることが出来れば、より高度な効果が得られるのではないかと感じました。また、その後の総会では、JIFRS で長きにわたり多大な貢献をなされました、小野征一郎名誉教授が表彰されました。

今回の専修大学大会開催にあたり、座長の多田稔会長、宮田勉様をはじめ、多くの JIFRS 関係者の皆様のご協力を頂いたと伺っております、また当日は運営上の不手際が多く、ご迷惑をおかけして申し訳ございませんでした。お詫び申し上げますとともに、皆様のお力添えに心より御礼申し上げます。

指導教員兼会場責任者追記（小川健）

今回は学生指導も兼ねてこうした参加報告を学生に敢えて書かせる選択を取ってみました。小川ゼミでは各学年・場所（生田・神田）で各々異なるテーマを扱っていますが、今回参加報告を書ってくれた沖園君をはじめ、シンポジウムに配置の神田の学生には貿易自由化と TPP・Brexit 等について（賛成側・反対側・実務面として等）様々な側面から取り上げる試みを行っています。学生には私が水産物貿易を研究対象の1つにしていることは軽く触れていたのですが、貿易の自由化を考える上で敢えて具体的な産業に焦点を当てて話を聞く重要性も知ってもらうため、今回シンポジウムに神田ゼミの学生を配置する選択を取りました。机上の理論だけでは見落とす側面があるので多様な視点を敢えて並列して取り上げることを大切にしてきましたが、沖園君の報告を見る限り、この多種多様の重要性の一端を感じてくれた意味では、ゼミ生としては及第点かと思います。

事務局便り

1. 2016年度総会：JIFRS 山本賞（国内賞）について

小野征一郎氏（東京海洋大学名誉教授）の長年にわたる熱意ある一連の研究成果と若手教育や本学会の知名度向上に向けた対外情報発信に対し功績賞が授与されました。

学会賞と奨励賞には推薦がありませんでした。次年度は多数の推薦をお寄せくださいますようお願いいたします。

2. 2016年度総会：理事・役員の改選について（敬称略）

8月6日の総会において、理事会から提案のあった黒倉寿副会長の顧問への就任、八木信行の副会長就任、旧理事のうち牧野光琢が退任、宮田勉（中央水産研究所）、東田啓作（関西学院大学）、婁小波（東京海洋大学）が新理事に就任、が承認された。

3. 2017年度 JIFRS 大会

8月5日（土）・6日（日）に、東京海洋大学にて行われる予定です。シンポジウムは国際資源管理に関連したテーマをとりあげる予定です。奮ってご参加ください。

4. 大会個別報告について

大会個別報告の申込みや、報告要旨、報告資料の提出において、締め切りがきちんと守られないケースが散見されます。締切りを段階別に設定していることもあり、お手数をおかけしますが、事務局作業の負担軽減のために、期限の遵守をお願いします。

報告資料（スライド）の事前提出をお願いしているのは、座長が報告内容を予め確認することで、報告時の質疑応答において、しっかりとした議論をおこなうためです。報告資料の印刷、配布についても、聴衆の理解を深め、質疑応答をより活発なものとするために、可能な限りおこなってください。

また、学会報告は、本来的には、一定程度まとまった研究成果を公表する場であり、そのために、報告時間も長めに設定しています。結果を取りまとめる前の段階での報告はできる限り控えていただき、また、漁業・水産業の直面する諸問題の解決に資する姿勢での報告をお願いします。

趣旨をご理解のうえ、ご協力をお願いします。